浜田医療センターの理念

医療を通じて「地域で生きる」を支援する

基本方針

1. 安全で良質な医療の提供
2. 患者に寄り添った医療
3. 介護、福祉との連携
4. 地域の町づくりに貢献
5. 地域住民と職員の健康増進
6. 持続可能な健全経営

患者さんの権利

- 人格・価値観が尊重される権利
- 良質な医療を受ける権利
- 十分な説明と情報を得る権利
- 自己決定の権利
- 個人情報が守られる権利

当院を身近に知っていただくため公式ホームページ及び公式 faceBook を作成しています。一度ご覧ください。

ホームページ

https://hamada.hosp.go.jp/

facebook

https://www.facebook.com/hamadamedicalcenter

浜田医療センター で検索！

contents

2〜3 特集：新型コロナウイルス感染症に対する当院の対応
コロナと向き合う〜看護師の立場から〜
4 認定看護師の活動について
5 地域連携室
6〜9 研修医だより
10〜11 治験に参加しませんか?と言われたら
12〜13 看護学校だより
14 がん相談支援センターだより
15 秋の特別メニュー / 新任医師紹介
発熱による年末年始の受診方法について
16 外来診療担当医表

特集

新型コロナウイルス感染症に対する当院の対応

呼吸器内科部長

柳川　崇

【やながわ・たかし】

・金沢大学 1990年 卒業
・呼吸器学会専門医・指導医
・趣味：ランニング、トレイルランニング、木こり、薪割り、薪ストーブを焚くこと

浜田医療センターでは昨年2月から病院を挙げて新型コロナウイルス感染症の受け入れ準備をしました。発熱外来を開始し熱のある患者様にはとりわけ神経質に対応しました。8月28日からは島根県からの要請により一つの病棟を空にしてコロナ専用病棟としました。専用病棟は4室（のちに6室）の陰圧個室と他の全病室にも陰圧装置を設置しました。当時その全室がいつか満室になるとは予想もしませんでした。コロナ対応病棟の看護師は防護具の着脱等受け入れのための訓練を何度も行ない、他病棟の応援業務をしつつ患者の発生に備えました。

初めての陽性患者さんの受け入れは昨年の9月でした。それから約1年で140名の新型コロナの患者さんを入院治療してきました。入院患者は主に呼吸器内科、総合診療科が担当しましたが、内科系各科、小児科も協力し、発熱外来は全科の医師が応援してくれました。医師・看護師はもちろん臨床検査、薬剤科、放射線、リハビリ、栄養、事務、清掃・洗濯業者など全ての部署の皆さんが支えてくれて病院のコロナ診療は成り立っています。本当に感謝しています。

全国では今まで第5波までの感染者増減の波がありましたが、次第に大きな波になったのはご存じと思います。当院の受け入れ患者数も次第に増加しました。昨年春の第1波では島根西部での発生は少なく当院も受け入れはありませんでした。その後9月と年末年始の第3波を合わせた入院患者数は10人でしたが、今年4月から6月の第4波では約30人、7月からの第5波では約100人と大幅に増えました。

新型コロナの患者が発生したとき、入院先の病院は島根県の広域調整本部が割り振りをします。今年4月から6月の第4波では浜田市内での感染者はそれほど多くなかったのですが、近隣の市町で発生した方の受け入れ要請が多数あり、当時のコロナ受け入れ病床19床の満床に近くなりました。5月中旬のピーク時には連日新規感染者の入院があり、私達コロナ対応スタッフは緊張の中にありました。もしその頃市内で更に多くの感染者が発生したら浜田市民でも当院に入院できない状況だったと思います。私達は「市民の方々には感染者が増えないような生活をしていただきたい」と願っていましたが、その願いはあまり通じていないと思いました。病院の逼迫状況など市民の方には伝わりませんし、首長や行政から感染拡大防止を意識した生活行動の呼びかけもなく、夜遅く帰宅のために駅前通りを通るときも平時と変わりないほどの飲食帰りの人を見かけました。「浜田では出てないから大丈夫」という空気があったのではないでしょうか。

第5波では8月に急速な感染者数の増加があり、受け入れ病床を29床まで増やすことになりました。8月中旬には浜田市内でも多くの感染者が確認されましたが、当院が満床のため入院できず他市の病院に入院された方も多数あり大変心苦しく思いました。この頃に医療逼迫を訴える当院の病院長のインタビュー記事が地元新聞に掲載されましたので目にされた方も多いと思います。幸い9月中旬以降感染者数は減少し落ち着きましたが、新型コロナウイルス感染症の流行が今後国内で、世界でどうなって行くのかはまだまだ分からないと思います。本当の終息にはまだ何年もかかるだろうと考えています。

COVID-19は病気として人々の健康を脅かすと同時に日常生活のあらゆる面に影響をおよぼし人類に不自由を強いてきました。世界が協調してこの危機に臨むことを期待しましたがそうはなりませんでした。人々の間に様々な分断を生み国と国との間の非難、政治への批判、感染者や医療者に対する不理解や偏見などが起こりました。本来感染することは不運、気の毒なことでしかないのに患者・感染者に対して偏見や批判、誹謗中傷が起きたことはとても悲しいことでした。

私はこの人類史上の危機の克服に一呼吸器内科医として最大限の貢献をしたいと考えて関わってきました。看護師たちも同じです。「使命感」とよくいわれますが、心を支えているのはそういう自己犠牲的な心情よりも、やるべきことを当たり前にやろうという「プロ意識」だと思います。

今後再び感染の波が起きるのか、それが今までより小さいのか大きいのか、軽いのか重いのか分かりませんが、新型コロナウイルス感染症の終息は医療者の努力で得られるものではありません。市民、国民、世界の人々が協調して少しずつコロナ終息に向かうことを願っています。

コロナと向き合う
～ 看護師の立場から ～

4階南病棟看護師長　小野　妙子

コロナと向き合う準備と装備

新型コロナウィルス感染症（以下コロナ）の患者さんを昨年9月から受け入れています。一般病棟からコロナ専用病棟へ変更するために、病室には陰圧空調設備を備え、病棟の環境を整えながら対応してきました。

感染対策については、テレビなどで目にされた方も多いと思いますが、患者さんに対応する際、医師や看護師は、「防護服」を装着します。その装備は、①全身を覆う一体型のタイベックスーツまたは、長袖のガウン　②2重の手袋　③N95マスク　④不織布の帽子　⑤ゴーグルまたはフェイスシールドです。まさに重装備ですが、コロナは、「飛沫」と「接触」によって感染しますので、私たち医療者が感染しないようにするための必要な手段です。しかし、特にガウンはウィルスが付着、浸透しにくい素材でできており、サウナスーツを着ているような感覚です。看護師は、夏場、内側に保冷剤を入れたメッシュ素材のベストを身につけ、毎日のように、汗をびっしょりかきながら業務にあたりました。

第4波 ～感染への不安と重症化予防に向けた看護～

医療者のワクチン接種が終わって間もない頃で、感染に対し緊張感が高い状況でした。患者さんの症状の変化を予測しながら、医師・看護師間でカンファレンス（話し合い）を行い、コロナの最新情報を学習しながら、知識を深め情報共有を図りました。患者さんは、高齢の方が多く、重症化の懸念に加え、高熱、倦怠感、呼吸困難などにより、今まで普通にできていた日常生活動作ができない状態になる方もあり、筋力回復目的にリハビリ導入など検討しながら支援しました。

また、患者さんの症状の悪化に伴い、治療の選択について話し合いが必要になることもあり、患者さんとご家族とをオンラインで繋ぎ、話し合ってもらう場面もありました。そして、退院に向けたカンファレンスを医療チームで行い、安心して退院できるよう環境を整え、継続ケアにつなげることができました。

第5波
～変異ウィルスの脅威に負けない感染防止策に対する手ごたえ～

ワクチン接種から一定期間が経過し、感染に対する緊張感は和らいできた時期でしたが、強力な感染力をもつ「デルタ株」の流行により、緊張感が一気に増しました。患者さんは、中高年から若年の方が多く、家族内感染により小児を含め、ご家族で入院される患者さんが多い状況でした。いろいろな患者さんと出会う中で、コロナの知識不足や生活制限による不安感、孤独感、感染したことに対する自責の念など、身体症状だけでなく、精神的サポートが必要な患者さんの思いを受け止め、関わることの大切さを実感しました。

そして、多くの患者さんと接する中で、コロナという病気の特徴を改めて理解すると同時に、私たち自身の感染防止策の確かさを実感することができ、看護師としての自信につながりました。

コロナと向き合ってきた看護師の思い
～未曽有の感染症と日常、今後の希望～

医療者である私たちも、皆さんと同じように制限のある生活を送り、感染症への恐怖や、様々なストレスを抱えながらコロナと向き合ってきました。どうしてがんばれたかと振り返ると「使命感」の一言に尽きると思います。この1年間で、ワクチン接種が進み、抗ウィルス療法や抗体カクテル療法に手ごたえを感じ、経口内服薬の開発など明るいニュースも伝えられ、予防と治療が進んでいます。今後、コロナがどのように形を変えてくるのか予測がつきませんが、まだまだ気を抜かずコロナと向き合っていきたいと思います。

最後に、私たち看護師からのお願いです。ワクチン接種を迷っている方がおられましたら、是非、ワクチンを受けていただきたいです。一時的な副反応はあるかもしれませんが、コロナにかかった場合の苦痛や後遺症を考えるとそれに勝るメリットの方が大きいと思います。そして、コロナ禍前の生活に早く戻れるよう一人ひとりが予防に取り組みましょう。